

湧き出る「新語・造語」への対抗策

ジャーナリスト／海部隆太郎

時代が変化するのは当然のこと。しかし、問題はスピードが速すぎることだ。新しい考え方、言葉が出てくると、必死に流れに乗ろうと動き回り、何とか理解度を深めたと思ったら、次の新たな言葉(流れ)が登場してくる。それは発展性が高いITだからこそ、とめどもなく湧き出てくるのかと考えてしまう。それにしても、ついていけないことが多い。

インターネットの登場が世の中を劇的に変えた。そこから派生する新サービスを理解しようと解説書などを読むが、文字を追っかけていても途中から分からなくなる。そのまま放置していると、取材相手の発言の真意が理解できず原稿を書く段階で苦勞することが度々あった。

記憶に新しいことと言えば、クラウドは元々がインターネット創設の概念と理解していたので難しくなかったが、数年前からブロックチェーンの話題が増え、最近はやたらと経済紙の見出しを賑わすDX(デジタルトランスフォーメーション)が新語の主流ではと思う。DXは今さら聞けない言葉になっているようだ。内容を正確に把握していないと時代に乗り遅れてしまいかねない。この場で解説することもできないので、ビジネス常識としてある程度のことは知る努力をお勧めする。

新語辞典なるものがあり、アルファベット、カタカナで表記される新語類はある程度カバーできる。平易な表現で書かれており、膨大なネット情報から分かりやすい解説を探し出す手間が省ける。ただ、これも発行と同時に古くなるのが欠点。やはりIT関連で出てくる新語・造語に対応するには、ITに頼らざるを得ないだろう。

経済は“吐故納新”が基本なのか

それにしても私が記者全盛期のころは、経営者から頻繁に聞く課題は“リエンジニアリング”など製造技術から出てきた言葉だった。さらにパソコン以前にあったOA(オフィスオートメーション)などは、知らない世代の方が多いのではないかと。世の中の動きに合わせて、使われる言葉も仕組みも、どんどん更新されていく。それに対応するのが一苦勞。蓄積した知識が生かされればいいのだが、そればかりでないのが厄介だ。

こう考えると、経済とは“温故知新”ではなく“吐故納新”(とこのうしん=古いものを捨て新しいものをとり入れる)が基本なのではないかと思う。こうした考え方で割りきれば納得もするが、どうもしっくりこない。前述の新語辞典を参照しながら概念を理解することに努力し、何とか時代の流れに乗ろうとする日々が続いている。この繰り返しがかれからも続くのかと思うと重荷だ。

経営者の話を聞き、課題や対処法を文章にまとめて報告するのが私の仕事。つまり、実業に関わっていない。先輩記者から「俺たちは虚業の世界で生きている」と教わったことがある。成果物が文字しかないのだから虚業だという。前向きにとらえれば、実業に携わる人から謙虚になり話を聞き教えてもらう姿勢を忘れるな、ということだろう。だが、虚業発の新語が実業の人たちをかき回してしまうことも少なくない。この見極めが大事だ。

激しい世の動きをキャッチアップして生きているつもりだが、人としての本質は十年一日のごとく、何も変わっていないと確信する。今は、何とかスマホを使いこなせていけばいいのでは、との感覚が強まっている。

【筆者紹介】海部隆太郎(かいべ・りゅうたろう) 法政大学卒。日本工業新聞社、IT企業を経て独立。中小企業を中心に企業が抱える幅広い課題を取材・執筆活動を展開する。